

黒田清輝「野辺」に託された真意

清水 友美（成城大学）

黒田清輝が、1907年に制作した「野辺」は、黒田の後半生を代表する作品である。本作は、黒田のフランス留学時代の師であるラファエル・コランの「フロレアル」や「眠り」を踏襲した作品であることが、先行研究で指摘されてきた。しかし、そこに託された意図は未だ明らかにされていない。本発表では、まず黒田が本作の裸婦のポーズに、西洋の裸婦像の定型的なポーズである「アリアドネ・ポーズ」を意識的に選択したことを指摘する。更に、白馬会画家たちが、画中の花に寓意を託したことを鑑み、黒田も裸婦が左手に持ち、見つめている「ヨメナ」とされている花に、何らかの寓意を託したと考える。この2つの新たな視点を据えることで、黒田が本作に込めた真意を考察する。

本作の裸婦のポーズには、両腕又は片腕を頭の後ろに回す「アリアドネ・ポーズ」が意識的に選択されている。西洋ではギリシア神話に登場するアリアドネなどを描いた作品に、このポーズが多く用いられてきた。黒田の盟友である久米桂一郎が、ギリシア神話に関する所論を著していたことから、黒田もギリシア神話を熟知していたことは明らかで、その物語をヒントに本作を制作した可能性は高い。また、黒田の絵画論から、象徴主義に関心を示していたことが分かり、本作は上記のようなモチーフを用いることで何らかの寓意を含んだ作品と見なせよう。そこで、恋人にナクソス島に置き去りにされたにも関わらずに眠るアリアドネの物語から、黒田はアリアドネ・ポーズに「別離」の寓意を託したと考える。

次に本作の裸婦が左手に持つ花であるが、従来秋に咲く「ヨメナ」と指摘されてきた。しかし、背景に背の低い若草と春に咲くシロツメクサが描かれていること、当時の新聞で本作が「春の野」と報じられていること、参考にされたコランの「フロレアル」が春の寓意画であることを勘案すると、本作は春の情景を描いた作品と考えられる。描かれた花も春の花とすれば、従来指摘されてきた「ヨメナ」ではなく、花の諸特徴から、古来より日本のみで自生する「ミヤコワスレ」が適当である。ミヤコワスレは、承久の乱で佐渡に流された順徳上皇の故事から、別離の花意が託されたことにより、アリアドネ・ポーズの寓意と一致することとなる。

本作に「別離」の寓意があるならば、他の白馬会画家と同じく、裸体画に寓意を託す西洋絵画の伝統的手法を示す戦略の1つであったことは明らかであろう。しかし本発表はそれだけでなく、そこに黒田の西洋絵画導入の新たな試みが託されていることを提示したい。当時、黒田が著した絵画論には、洋画に日本的な要素を加味するという新たな試みへの挑戦が吐露されている。となれば、本作は西洋の裸婦像の定型の1つであるアリアドネ・ポーズに、その寓意を同じくする日本独自の花であるミヤコワスレを描き入れることによって、黒田が新たな日本的な洋画を模索した作品と言えるのではないだろうか。